The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「中国帰国生徒」にみる位置取りの模索 : 日本で成育してきた若者を中心に
Author(s)	葉, 暁瑶
Citation	日本学報. 2017, 36, p. 37-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/67849
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【研究ノート】

「中国帰国生徒」にみる位置取りの模索

―日本で成育してきた若者を中心に―

葉　暁　瑶

はじめに

戦争終結から70年を過ぎたいま，日本と中国の戦争体験をめぐる語りはなお継続している。歴史の荒波のなかで，旧満州を中心に中国各地に取り残され，長い年月を経て日本に帰ってきた人たちがいる。

日中国交正常化（1972年）以後，とくに1980年代から，中国から日本への帰国者とともに，多くの学齢期にある子どもたちが来日してきた。

中国残留日本人・中国帰国者だけではなく，こうした子どもたちの抱える課題についても，さまざまな分野による研究がなされてきている。中国側の関亜新・張志坤［2005］では，戦後直後に中国人養父母に引き取られた時点から，日本に定住するか中国に残るかという現在の生活に至るまでを視野に収め，中国残留孤児をめぐる諸問題を捉えている。

日本側に目を向けると，1990年代から2000年代にかけての帰国者研究は，当時10代後半～20代前半がほとんどであった二世・三世に注目が集まっていた。彼らの教育や就労の問題への対策など「外面」に関する調査研究（蘭信三［2004］，倉石一郎［2006］，広崎純子［2006］，黄英蓮・依光正哲［2004］）がある一方，「内面」に目を向けた研究もある。筑波大学社会学研究室［1996］では，帰国者二世・三世における多様なアイデンティティが示され，大久保明男［2000］は「中国日裔青年」として二世・三世の積極的な姿勢を提唱している。

2000年代後半に入ると，「三世・四世」が小学校に通いはじめた。中国で学校生活を送ったのち，学齢途中で来日してきた「編入児童」もいれば，日本で生まれ，あるいは幼い頃に来日した子どもたちもいる。阿久澤真理子［1998］と志水・清水［2001］は日本の学校に編入してきた「帰国生徒」をニューカマーと捉え，彼らに注目したのと対照的に，高橋朋子［2009］は「中国帰国日本生まれ児童」に焦点をあてている。

しかし，2000年代後半時点では彼らはまだ小学校に通う年齢であったため，自分のアイデンティティについて考える発達段階に到達しておらず，またその思いを語ることも難

しい状況にあった。「帰国児童」のアイデンティティについては，「彼らが高校生になるころの新たな課題としておきたい」と高橋［2009：238］は述べ，調査分析のためにはなお時間がかかることを指摘している。だが，「中国帰国日本生まれ児童」が成長して高校（さらには大学）に進学し，「帰国生徒」になってからのアイデンティティを考察する研究はまだ登場していない。

海外帰国子女のアイデンティティの研究に取り組んだ渋谷真樹［2001］は「帰国子女」がひたすら「位置付けられる」一方であることを強く否定し，アイデンティティの複層性と流動性を前面に出すため，「位置取り」という概念を導入している（とくにpp.36-39参照）。さらに，南誠［2016］は，中国帰国者の個人に焦点を合わせ，「位置取り」という言葉を繰り返し用いて（とくにpp.33-34およびp.234参照），当事者は「いかなるアイデンティティのパフォーマティヴィティを遂行」したのかを明らかにしようとしている。ただし，南の調査対象は中国帰国者一世に集中し，下の世代については論述されていない。

本稿では，先行研究に提起された「位置取り」という概念を援用しつつ，「中国帰国生徒」のアイデンティティの動態を明らかにしていきたい。なお，本稿で上述の該当者を「帰国生徒」というのは，家族の歴史に「中国残留」と「日本帰国」が含まれ，彼らの現在が祖父母の歴史的背景から引き継がれているからである。ここで，本稿の主要インフォーマントについて記しておきたい。

主要インフォーマント一覧

仮名	性別	残留邦人との関係	国籍	中国経験	現　在（2015年12月）
允雄	男	祖母	日本	2歳まで。大学を卒業してから北京の大学院に3年半留学。	会社員
康一	男	祖父	日本	3歳まで。中学校の夏休みに中国の中学校を2週間体験。	大学院1年生
理沙	女	祖父	日本	6歳から，学校の長期休暇中に中国の親戚の家に滞在。中1から現在まで中国に在留。	高校3年生

（インフォーマント３名の普段使用する，または筆者との会話において使用する言語は，日本語である）。

１．日本での「中国人」，中国での「日本人」

1988年に允雄の祖母は残留孤児として，中国の長春から日本にやってきた。2年後，娘一家3人が来日した。当時の允雄は2歳だった。筆者は大阪帰国者センターで允雄の祖母

と知り合った。允雄について，祖母が語ってくれた以下の話が印象深く残っている。「2歳半で来てたが，もう中国語が話せていた。何でも話せるよ。こっちの保育園に通ったら，「山東省のなまりがある」って笑われたことがあるようだ。それで，中国語をわざと使わないようにしたんだ」(2014年5月29日)。筆者は允雄とSMSで連絡を取り，2015年12月5日に允雄と面接した。

(1)中国語のできなさが悔しい「中国人」

允雄とのやり取りを通じて彼が学部を卒業してから北京へ留学に行ったことがわかった。そして「なぜ北京への留学を決めましたか」と筆者が聞いたところ，「やはり中国で生まれたのに中国語が出来ないのが悔しくて，北京への留学を決めました！」(2015年10月24日）と返事が来た。「悔しい」という言葉は，面接においても，何度か繰り返された。

ちょうど言葉に親しみ始めたところで，一家は日本に渡ってきた。允雄は保育園では日本語を聞かされ，家では父母が日本語の勉強に取り組んでいた。彼と違い，8歳下の妹は日本語とある程度の中国語が話せるという。妹が生まれた年は，允雄一家の訪日6年目だった。家での会話は，すでに使いやすい中国語に転換していた。妹との対比を通して，自分の中国語のできなさを「悔しい」と允雄が思い始めたと考えられる。

筆者は允雄の妹へもSMSで聞き取りを行った（2014年10月23日～2015年2月3日)。「中国をどう思います？自分との関係はどうでしょう？」という問いに，妹は「好きです。日本の次に自分にとって近い国だと思ってます」と答えてくれた。允雄の方は「中国についてはやはり母国という認識です。自分が生まれた国なので」と述べていた。そして自分は「中国人です！」と主張した。さらに，筆者が「でも，允雄さんは中国語より日本語のほうがうまいじゃないですか」と疑問を示したところ，彼は「そうですね，でもやっぱり中国人の家庭で生まれたし，自分は中国人だと思っています！」と自分の立場を強調した。

中国語を話せなかったことは，かえって允雄の「中国人」という位置取りを促すようになっている。北京留学までの経緯が示すように，允雄のなかには「家族のみんなが中国語できるのに，なぜ僕だけができないの」という思いがあり，家族の影響のもとで「やっぱり中国人の家庭で生まれたし，自分は中国人だと思っています！」という位置取りを選択したと考えられる。なお，允雄のなかには幼い頃から徐々に失われていった中国とのかかわりを取り戻すという強い意欲が感じられ，中国人としての位置取りは，允雄の家族という共同体への参加にも役立っているだろう。

(2)北京での「日本人」留学生とその後

允雄が中国に留学していたあいだに自分をどう思っていたのかを筆者は尋ねたく，「北

京に留学しているときも，「あ，僕はこの国の人間だ」とか思ったりしました？」という質問を発したことがある。「さあ，どうだろう。留学に行ったら，やはり日本人かな。だって，留学っていうし」と允雄が疑問気味の顔で答えた。

大学院に入るため中国語能力が必要となり，最初の一年半はその勉強に没頭していた。日本人の友だちはもちろん，中国やほかの国の友だちもできた。とはいえ，彼の語りから，日本人コミュニティとの付き合いがはるかに多かったことがわかる。日本人駐在員のバレーボールチームへ参加したり，日本人留学生と旅行に行ったりした。

ただ，日本人コミュニティとの付き合いのなかで，自分が中国料理にすっかり慣れていることに気づいた。周りの人が辛い料理や中国独特の香料に不慣れな表情を表したときでも，允雄は平気な顔で食べ進めることが少なくないという。そして，休みのときには，長春市にいる親戚を訪問している。また，中国の学生と新しく出会ったときは，しばしばみずから中国とのつながりを言い出している。

現在，京都の会社に勤めている允雄はときに中国やシンガポールに出張する。向こうに専門通訳者がいるにもかかわらず，正式な仕事でない場面では，允雄が通訳としても活躍できるようになっている。「帰国生徒」だった允雄のその後の歩みは，北京に留学したときにまとめた修士論文（允雄の許可を得て閲覧させていただいた。原文は中国語，翻訳は筆者による）の行間からうかがえるように考えられる。

全6章で構成される修論は，経営学の視点から残留孤児一世の現状や解決されていない問題を見つめ，おもに日本で実施された支援政策を概観したうえで，就職支援における課題をまとめている。とくに政策の展開においては，残留孤児および家族の劣勢が一面的に強調され，彼らの潜在的な能力の開発に取り組んでいない現状の問題点を指摘する。さらに，允雄は二世・三世の主体性に着目し，彼らが有利な条件を持っていることにふれる。それは「中国語能力」と「ほかの十分に認められていない能力」を持つことである。続いて，「日本の企業は日本国籍の人材に管理的な仕事を任せる傾向がある。そうした背景のもと，留学生やほかの華僑集団などと比べると，残留孤児集団のほうが優位な地位に立っている」ことが指摘されている。つまり，允雄は二世・三世の有利な条件は，日本人と比較した際の「中国語能力」や，留学生や華僑が持っていない「日本国籍」にあると捉えている。そこから，允雄自身のキャリアに関する考慮が読み取れる。北京で中国語を勉強して戻ってきた允雄は，日本人社員や中国からの留学生と比較する際に，自分の優位が「中国語能力」と「日本国籍」にあると自覚しているといえる。

小学校時代から日本国籍を持っていることもあり，そして成育期間のほとんどを日本で送ってきたこともあり，允雄の「見た目」も「中身」も日本人学生のようになっている。だが，中国語の不十分な允雄は，あえて「中国人」という位置取りを主張することによって，家

族への帰属を強調しようとしたのであった。中国に渡っていったら，ほかの留学生同士とほぼ変わらず，その国の言語を勉強し，誰も疑いなく彼を日本人留学生として受けとめていた。允雄はそのような周囲からのまなざしを内面化しつつ，相手に受容されやすいアイデンティティを意識することによって仲間入りを果たした。それにつれて，自己もその位置取りを認めるようになっていく。また現在の就職先では，允雄は置かれる場によって，位置を選択しているように思われる。つまり允雄は，複数のアイデンティティのありかたを意識的・無意識的にその都度選び取りながら，みずからの人生を生きているのである。

2.「僕は帰国者三世」

中国残留日本人を父方の祖父に持つ康一は3歳まで中国に住んでいた。その後，両親が康一の教育環境を考慮し，日本に移住することを決めた。2015年12月現在，23歳の康一は大学院一年生である。

筆者は「大阪中国帰国者センター」で行われた「中国残留邦人等への理解を深める集い」（2015年10月29日）の会場で康一と出会った。センター理事長の講演が終わると，康一が手を挙げ「僕は帰国者三世です」と簡単に自己紹介してから，理事長に帰国者支援について質問した。その後筆者は康一と面接およびメールやSMSなどで連絡を取った。

以下は，①面接（2015年11月5日，大阪市内），②メール連絡（2015年11月8日～28日），③SMS連絡（2015年11月5日～12月4日）で得られたデータから適宜引用しつつ，彼自身による位置取りの変化をたどっていく。

(1)「母からの電話がいや」

康一は保育園から日本の学校に通いはじめ，半年間で日本語の壁を乗り越えて以降，言語上の問題はほとんどなくなっている。両親は中国語で話しかけてくることが多い。母からの電話では中国語が使われるから，周りの同級生に聞かれたら困ると思い，康一は母からかかってくる電話を恐れていた。

ほかの日本人生徒と変わりのない日本語によって，自分がようやく普通の日本人生徒として認められるかと思いきや，母からの電話，父母のPTA参加が，自分の位置に脅威をもたらした。康一はそれらを避けようとした。ここで第1節の冒頭に記したエピソード――幼い允雄の発音が「山東省のなまりがある」と笑われたという――が思い起こされる。いずれのケースにおいても，日本社会の異質なものに対する同化の権力作用が働いていると言える。そのように向けられたまなざしに対処するために，康一も允雄も周りとの同調を維

持する振る舞いをとるようになったのである。

(2)「ばれたことがない」

康一は志望していた高校を経て名門大学に進学した。大学では，自分の「中国とのつながりが一度もばれたことがない」という。ただし，大学生になって中国語の授業を受けることをきっかけに，母からの電話を「いや」と思わないようになったという。「同じく初修とはいえ，語学に非常にアドバンテージがあるという点で，自分の家庭に対する考えが変わった」と康一は語ってくれた。

ちょうど同じ時期，中国語勉強が日本国籍への申請と重なり，それらは康一のそれからの歩みに大きな影響を及ぼしたことが考えられる。帰化を申請した際，初めてはっきりと自分が帰国者三世であることを意識するようになった。

自分のことを「帰国者三世」と言い出すようになったのは国際関係学部に入ってからのことである。さらに別分野の大学院に進学し研究に従事しているが，康一は「大学院のコースでは日本人ばかりで，多様性が欠けている。国際関係の学部では留学生がたくさんおる」と学部時代を振り返って言う。つまり，多様性に富んだ国際関係学部であるからこそ，家族の側から「中国とのつながりがばれない」にもかかわらず，「相手が自分の出身地等を話した際，僕も中国とのつながりを言った」というわけである。ここから，大学という場に身を置くことによって，中国帰国者三世という位置取りを意識するに至ったことが浮かび上がる。

(3)「お互いの立場に立ってみたり」

大学に入学した康一は，NPO団体や小規模な学生ボランティアサークルに参加していた。それは，東北被災地支援のため入会したのである。熱心な支援活動によって，全国規模の支援活動に取り組んだ一員となった康一は，中国帰国者三世という位置を意識しながら，社会参加していくことによって，日本社会でのローカルな住民の一員としての位置を固めていくことが考えられる。

康一は大学生になってから残留孤児の孫であることを意識し始めた。ここからは，その「意識」が彼に何かの影響を及ぼしているのかについて考察していく。

> ゼミや授業で中国の様々なことを学びましたが，中国に対してポジティプなイメージはあまり抱くことが出来ませんでした。ただ，そのような問題を家族に言うと，だいたいは中国を擁護するので，日中の考えの違いを知るために役立ちました（2015年11月28日）。

康一は上記のように語ってくれている。そこから，康一が自分の位置を日中の国家間から見出そうとしていることは読み取れるだろう。つまり，彼は「日中の考えの違い」としてそれぞれの主張を冷静に見ながら，二つの国の間に立つようになっている。

就職への希望について，康一は「国家間の仕事をしたい」と言ってくれた。さらに，目標としている職業は「見識が広くないといけない」ので，「仮に，LGBTや外国人等の広い意味でのマイノリティに対して，その置かれている状況を理解し，共感できるような」（傍点は筆者，以下同様）職員がいれば，「提案できる内容も増えるでしょう」と話したあとに，「私の外国のルーツはそういう意味で強みになる」と，康一は言い添えた。要するに，康一は中国とのつながりを肯定的に捉えるようになっている。

筆者は上記の語りに出てきた「マイノリティ」という言葉が気になった。さらに聞いてみると，康一は以下のように答えている。

> あ，自分がマイノリティかどうかは，はっきりお答えはできません。
> マイノリティでもあるし，マジョリティでもあると思います。
> でも，だから政策の提案をする際に，マジョリティの視点とマイノリティの視点を持つことができると信じています（2015年12月4日SMSチャット履歴より）。

さらに，「外国のルーツ」をいつも意識しているのかと問うと，康一は「いつもというわけではありませんが，日中関係のニュースを読むときは，お互いの立場に立ってみたり」と答えた。

中国語クラスでの「アドバンテージ」や外国にルーツを持つ留学生との共通点から，大震災の支援活動を経て，「お互いの立場」に立ちつつ就職活動に励んでいる現在まで、康一は中国とのつながりを認める一方，日本とのつながりも深めている。そうするなかで，彼は「国家間」のようなところに自分の位置が見つかるようになる。つまり，ハーフではなく，ダブルのような位置取りができるようになったといえよう。

３．習いたくない中国語と加点になる中国経験

日本で成育してきた「帰国生徒」のうち，少し変わっているように見えるのは，学齢途中に中国で学校への編入を遂げた理沙の事例である。

中国の蘇州で，筆者は理沙の家庭教師を2010年から1年間勤めた。理沙の両親は中国語を母語として使っているが，理沙の中国語使用は自由とは言えない。そうした生活の表

面における言語使用のズレへの注意をきっかけに，理沙の家族がどのように日本と中国を往来してきたのかに関心を持つようになった。

のちになってわかったのは，理沙の祖父が残留孤児で，1980年代に理沙の祖父母は帰国申請を出し，1989年に永住帰国をしたことである。その後，理沙の母と中国で出会った理沙の父も日本に移住し，仕事を見つけた。2010年，会社の派遣によって中国の蘇州に転勤した。理沙と母は日本国籍を持っているが，理沙の父は仕事上の便宜を考え，日本に帰化せず永住権を取得した。

2014年の3月には理沙本人にインタビューを実施した。そして，2015年11月には受験する直前の理沙と，また理沙の母とネット通信を通して進学を中心に話を交わした。

(1) 日本人学校に通っている日本人生徒

理沙一家にとって，2010年の中国への移住は，海外勤務の意味を帯びている。海外（中国）滞在の日本人が集中している地域に居住してきた。蘇州での日本人学校は中学までしかないので，卒業後上海日本人学校の高等部に移った。2015年12月現在，理沙は上海日本人学校高等部の3年生である。理沙の母の語りからは，子どもの教育や言語系統が一貫できない状態を心配していたことがわかった。それは中国に渡っていっても，理沙を日本人学校へ行かせ続ける理由にもなっている。

日本の雑誌や新聞は日本に関する情報取得の手段の一つとして理沙の家族の生活に入っている。筆者は理沙と一緒にテレビを見たり歌を聞いたりしたことがあり，彼女がいつも日本の番組や歌を選んだことが印象に残っている。なお，理沙の母の付き合う相手は日本人学校の「ママとも」が大多数である。理沙の通っている日本人学校を中心としたコミュニティが形成され，子どもだけでなく親同士の結びつきもできている。理沙によれば，日本に住んでいたとき，親の関係でまだ中国人の友だちを持っていたが，中国に移住したあと，かえって周りに中国人の友だちが一人もいないという。

理沙が中学校2年生のとき，「中国語で話してみないか」と筆者が尋ねたところ，返ってくる答えは「習ったことはない」，「習いたくない」，「習わなくても大丈夫」しかなかった。だが，理沙は「小さい頃から，中国語で話したことがあったから，人に「すごい」とほめられたことがある」(2014年3月16日）と言ったことがある。理沙の母に聞いてみたら，「使うところないもんね」，「学ぶ必要もないだろう」という答えであった。なお，日本人のネットワークにおいて，中国語を話したらいじめられる可能性があると理沙の母も言った。理沙の主張と母の心配の背景には，日本人学校でのまなざしによって，理沙が日本人生徒という位置取りを確保しようとすれば，中国語を拒否せざるを得ないという事情があることが読み取れる。

(2) 中国言語と経験との直面

2014年3月に理沙と再会を果たした際，三年ぶりの再会であるため何か変化があるかどうか気になり，筆者は次のように聞いてみた。

＊：「どう？中国に来て遅くとも早くとも4年間経とうとしているね。何か新しくできたことがあるのか」

理沙：「ええ，どうだろう……中国語は前より使うようになった。家で母と日本語で話しあっているが，外に出るとできるだけ中国語を使う」

（2014年3月16日，＊は筆者）

ここから考えられるのは，中国語が主導である社会では余計に気づかれることのないようにするため，外出したときは中国語で話し合おうという決意である。もう一つ考えられるのは，日本人学校での日本人生徒との関係において，理沙は自分の位置をしっかりと取っている現在だからこそ，かつての中国語への拒否が薄まっているという点である。

2015年12月に受験生となった理沙に話を聞くことができた。理沙は指定校推薦入試の資格をもらった経緯を話してくれた。一般入試に比べると，推薦入試のほうは小論文と面接に重点をおいている。理沙の場合は，小論文は自己推薦文である。「面接で何をアピールしたらいいか」と理沙に尋ねてみたら，理沙は海外経験が加点であるということを明かにしてくれた。2015年12月中旬に，推薦入試を受けた理沙から，合格の朗報が届いた。

理沙は大学生活への期待を語っていた。「大学に入ったら，まずは勉強です」，「あとは，サークル活動かな」と理沙は前向きな姿勢を見せている。

「中国帰国生徒」にあたる理沙の場合では「日本人生徒」という位置取りは変わっていないが，ここまで追跡してきてわかるように，その過程においては小さな変化が起こっていた。つまり，理沙は中国に渡っていったあと，保持されてきた日本人生徒としての位置が揺さぶられる可能性が芽生えた。それゆえ，彼女は中国語への拒否を示したのである。一方，日本人学校という場所は日本人生徒という位置を守ってくれている。続いて，日本の大学に申請する段階に至り，その際は理沙がもう中国に転居して5年間が経ち，日本人学校にいる日本人生徒の一員としての位置が確立していた。その位置は安定し揺るがない状態でありながら，理沙は自分の中国経験を特性として活かし大学への進学を果たした。要するに，日本人生徒としての位置取りが理沙の軸であり，それを保有しつつ，彼女は中国とのつながりに対して「拒否」から「積極的な直面」への変化を遂げ，微細な位置調整をしてきたのである。

おわりに

個人に焦点を合わせながら中国残留日本人のアイデンティティを研究している南［2016］は，取材対象者が「自己の位置を，それぞれ異なる実践の場において，中国残留日本人孤児，日本人，中国人という三つのアイデンティティを使い分け」ていることを明らかにし，中国残留日本人が「能動的に位置取り戦略を用いた」ことに注目している。この点をふまえたうえで，本稿では，帰国者世代が三世，四世まで下ると，それぞれのアイデンティティの動態がどうなっているのかを究明してきた。

「帰国生徒」の位置取りを検討するにあたって，そこにおける歴史と主体との関係および上の世代とのつながりをどう考えたらよいのか。ホールは「文化的アイデンティティ」を考察するために，下記のような示唆的な提案をしている。

> 少なくとも，（中略）二つの方法があるだろう。第一の立場は，「文化的アイデンティティ」を，多くのより表装的または人工的に押しつけられた「自己」を内部に隠蔽する，一つの，共有されたある種の集合的な「一つの真なる自己」――ある共通の歴史と祖先を持つ人々が共有しているもの――という観点から定義する。この定義に沿う限り，私たちの文化的アイデンティティは共通の歴史と共有された文化的コードを反映するということになる。（中略）第二の立場は，多くの類似点に加えて，「実際の私たち」――むしろ歴史が介在してきたがゆえに「私たちがなってしまったもの」――を構築する深層の決定的な差異というものがある，ということを認める［ホール 2014：91-93］。

ホールの論述から，歴史と主体との連動によってアイデンティティが構築されることがわかる。「帰国生徒」の事例をもう一度思い出してみると，そこにあらわれたのはまさに歴史を持ちながら，いま-ここにおいて現実的効果のある位置取りであろう。

第1節で登場したのは，日本で自分を「中国人」と主張しているが，中国での留学経歴をふり返ってみるとき，自分はやはり日本からの留学生であり，もっと言えば「日本人」であろう，と自分の位置を模索しつつ求めていった允雄である。そして就職してからの允雄は，「中国人」でもいいし，「日本人」でもいい，この両者のあいだを行き来しながら，仕事にもっとも対応できる位置取りを模索している。

第2節では，大学まで中国とのつながりを避けるようにしていた康一が，大学に入り中国語クラスで中国語能力に優勢が保たれている自分を発見した過程を分析した。国際関係学部に入り，康一は自ら中国とのつながりを言い出すようになった。そして，震災支援の

ボランティア活動への参加は康一の日本とのつながりを深化させてくれた。こうして，康一は日本と中国とのあいだに位置を取るようになっていく。二つの国家の間に主体的に探ろうとする位置取りの方法は，模索し続けてきてようやくたどりついたものである。

第3節では，中国語を拒否していた女子生徒に起きてきた変化を検討した。父の転勤にともなって中国に移住したにもかかわらず，日本人学校に入学した理沙には日本人生徒という位置を確保する責務が負わされていた。そうした外からの要求を内面化しつつ，理沙は中国語をかたく拒否する位置を取っていたのである。それから何年か経った。いま理沙は中国語を使うようになっている。それは，日本人生徒という位置がすでに確保されてからのことである。さらに，中国とのつながりは日本人学校にいるほかの日本人生徒にそれぞれの仕方で共有されている。理沙は共同経験となった中国経験に直面できる位置を取るようになっていく。

ホールはさらに述べている。「過去は私たちに語り続ける。しかしそれ（過去）はもはや私たちを単一の事実としての「過去」へと位置づけはしない」［ホール 2014：94］。これまでの「帰国生徒」に関する先行研究やマスコミの報道は家族の歴史（「第一の立場」）に重きを置いているものが多いのに対して，本稿では「第一の立場」を念頭に置きつつ，「第二の立場」に脚光をあてようとしたところに特徴がある。

南［2016］は中国残留日本人のアイデンティティが「束」のような構成をしているとまとめた。そのアイデンティティの束は「容器としての行為体に貯蔵され，場に応じて戦略的/暫定的に表出されていく」［南2016：239］と説明している。「帰国生徒」がそれぞれの場面で周りと応対できる位置を模索する交渉は，まさにその「束」を構成していく行為である。さらに，「中国残留日本人孤児，日本人，中国人という三つのアイデンティティ」に限ることなく，アイデンティティの束にある軸を持ちつつ（たとえば，理沙の場合は日本人生徒という軸がある），日本と中国とのあいだに位置を取る傾向が「帰国生徒」に現れてくる。

本稿では，中国残留，または帰国の歴史を十分意識するとともに，「帰国生徒」に位置取りの意味を与えているのは，それぞれの主体の経験であり，その時その場での交渉の結果であると考えている。「中国帰国生徒」という位置は，上の世代とのつながりとして，歴史から引き継がれてきたアイデンティティの一つとして，日々の生活感覚のなかに生きている。というより，むしろ潜在化している。異なる場および場の参与者に合わせて，能動的にアイデンティティの束のなかの一つを表面に出し，その位置を取ることが「中国帰国生徒」の若者たちの実践であり，そこに国際化の流れのなかに生きる彼らの具体的な姿があることが示されたと考える。

参考文献

《日本語文献》

阿久澤真理子 1998「マイノリティの子どもたちと教育」中川明編『マイノリティの子どもたち』明石書店

蘭信三 2004『緊急シンポジウム　中国帰国生徒特別枠入試の意義と課題』平成12年度～平成15年度科学研究費補助金・基盤研究 (B)(1)

大久保明男 2000「アイデンティティ・クライシスを超えて：「中国日裔青年」というアイデンティティをもとめて」蘭信三編『「中国帰国者」の生活世界』行路社

倉石一郎 2006「挑戦する「中国帰国者特別選抜入試」：その歴史・現状・未来」『アジア遊学』85号（特集「中国残留孤児の叫び：終わらない戦後」）勉誠出版

黄英蓮・依光正哲 2004「中国帰国者2世・3世の日本への移住と就労」『世代間問題研究機構ディスカッション・ペーパー』210号（一橋大学経済研究所）

渋谷真樹 2001『「帰国子女」の位置取りの政治：帰国子女教育学級の差異のエスノグラフィー』勁草書房

志水宏吉・清水睦美 2001『ニューカマーと教育：学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店

高橋朋子 2009『中国帰国者三世・四世の学校エスノグラフィー』生活書院

筑波大学社会学研究室編 1996『中国帰国者二世・三世：中国と日本のはざまで』筑波大学社会学研究室

広崎純子 2006「中国帰国者二世・三世の進路選択」『アジア遊学』85号（特集「中国残留孤児の叫び：終わらない戦後」）勉誠出版

ホール，スチュアート（野崎孝弘訳）1998「グラムシとわれわれ」『現代思想』26巻4号（青土社）

ホール，スチュアート（小笠原博毅訳）2014「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』42巻5号（青土社）

南誠 2016『中国帰国者をめぐる包摂と排除の歴史社会学：境界文化の生成とそのポリティクス』明石書店

《中国語文献》

关亚新・张志坤 2005『日本遗孤调查研究』社会科学文献出版社